



私考モーツァルト

板東 浩

モーツァルト生誕二百五十周年ということで、二〇〇六年は様々な企画で賑わしかった。雑誌やテレビで取り上げられ、彼の天才ぶりや養育歴などが紹介されていた。

実は、モーツァルトと私は、よく似ているのである!? えー、いったいどんなことか、と首をかしげたくもなるだろう。実は、モーツァルトは一七五六年一月二十七日生まれ、私は一九五七年一月二十五日生まれ。生年月日の数字が類似点なのだ。というようなとってつけた冗談はさておき、私は、内科医に加えてピアニストでもあり、数年前から「癒しのモーツァルト」という音楽CDが五枚組、三枚組、単品で発売され、その解説を担当した。インターネットの検索サイトで「モーツァルト 板東浩」と入力すると、関連のホームページが表示されるので、いちど試聴してほしい。

その中で触れているのが、音楽の効用や音楽療法、「モーツァルト効果」である。十数年前、「モーツァルトの音楽を聞くと頭がよくなる」というニュースが世界を駆け巡り、一挙に知られることに。大脳生理学的には、空間認識の能力がアップするようだ。

専門家ドン・キャンベルらの研究もあわせ、「モーツァルト効果」のポイントは・ストレスを緩和し、眠りを誘い、身体を活性化できる・記憶力、注意力、学習スタイル全体を改善できる・想像力を増し、不安を軽減するイメージを得ることができる・音楽をセラピー的に用い、精神的、身体的な障害や傷を癒すことができる。

音楽は人の心身に働きかける力 (Power of Sound) を持つ。音楽で心を癒すのが「サウンドヒーリング」で、音楽は人により違ったように響く。メロディ、リズム、ハーモニーが美しく組み立てられると、心や身体、精神、感情は、調和の世界へと誘われる。特にモーツァルトの音楽で癒されると有名なのは、なぜだろうか? 私はここで、新しい説を展開したい。キーワードは「言語」で「Power of Tongue」となるだろう。モーツァルトはとても語学に長けていたのをご存じだろうか? 幼少時からヨーロッパ中を演奏旅行で移動し、各地で生活していたからであろう。少年時代には少なくとも十四の言語で話したとされ、五カ国語を使い分けて数多くの手紙を残しているのだ。

音楽と言語の深い関係は以前から指摘されている。音楽を認識するのは大脳の側頭葉で、言語機能も同じ領域だ。微妙な音を聞き分ける耳を持つ音楽家は、当然、微妙な発音やリズム、イントネーションも理解できるはず。逆に言えば、英語の th や、フランス語の r、ドイツ語の x など高周波の摩擦音などを聞き取り、すぐに真似て発音できる能力がなければ、音楽的能力も大したことはない。

本邦でトップクラスの音楽大学に入学したければ、高いレベルの英語能力が必要。英語を自由自在に扱えるレベルでなければ、音楽用語に繁用されるイタリア語もマスターできない。歌劇を考えてみると、人々の会話に抑揚がついたものがオペラ曲になるのだ。近頃、音楽劇を観ていて、詩と歌とがぴったり合って素晴らしいミュージカル曲に出会うこともあれば、不自然なリズムとイントネーションで奇妙な違和感を感じることもある。

話を戻し、モーツァルトと私を比較してみよう。彼は十四カ国語で意思疎通が可能で、私は二カ国語しか話せない。バイリンガル (bilingual) ほどでもなく、二枚舌でもない。演奏については、彼は多くの楽器を弾きこなしたが、私はピアノが主で、少しホルンを吹いたことがある程度。阿波踊りの横笛もうまく吹けず、ホラなら吹ける。結論として、私に似ているとはいえず、モーツァルトとは月とスッポンぐらいの格差と品格がありそうである。

(日本音楽療法学会評議員・医博)

誌友集

肥満脱出大作戦

医学博士 板東 浩 著

肥満についてユーモラスに解説している異色の医学書

南山堂

〒113-0034 東京都文京区湯島4丁目1-11

定価(本体)500円+税